

'03 年頭にあたり

教育・研究環境を更に整備 理事長 山下 徳夫



平成15年の年頭にあたり、謹んで新年のご祝辞を申し上げます。

少子高齢化が進みつつある社会において、その影響はまず短期大学の志願者数の減少に如実に表れており、いよいよ本年からは18歳人口の急激な減少期を迎えます。大学にとりましても危急存亡を賭けた厳しい競争が、今まで以上に現実味を帯びて押し寄せてまいります。本学といたしましても、手をこまねいてその状況を傍観している訳ではなく、個性的で魅力ある大学作りのために、教職員が一丸となって進むべき方向性を検討し、次々と実行に移しております。

大学が「知の創造と承継」の拠点であることは言うまでもないことですが、世界から見た現在の日本の大学は、決して国際競争力のあるものとは言えないでしょう。その原因は、日本が順調な経済発展を遂げてきた反面、大学がその存在価値を積極的に高める努力を怠ってきた結果ではないかと考えております。

教育は、即効性のあるものではありません。しかし、日本の将来を考えると、この危機的ともいえる経済、社会情勢を乗り切り、日本という国が更なる発展を遂げて行くためには、人材の育成ほど重要なものはありません。大学関係者が持続性を持って、学生の潜在的な能力を引き出し高める努力をし、それによって学生の知的欲求を刺激し、自ら考え学ぶ楽しさを教えることこそ何より重要なことであると考えます。柔軟な発想と行動力ある人材の育成、さらには生涯学習教育を通じて、世代にとらわれない幅広い人材の育成が、大学に課された至上命題であると肝に銘じております。

「社会に対する報恩奉仕」は、本学に連綿と受け継がれてきました建学の精神であります。これからはそれに加えて「社会知性」の開発を目指して、総合的な教育・研究に必要な環境の更なる整備に取り組んでまいります。

在学生の皆さんは、大学の知性、物的財産を有効に活用され、貪欲に専門知識の吸収と創造性豊かな人間性を育んでいただきますことを切に希望します。また、ご父母並びに校友の皆様におかれましては、大学を支えていただく大きな力として、一層のご支援とご協力を賜りたくお願い申し上げます。年頭の挨拶とさせていただきます。

魅力ある大学作りへ一丸 学長 出牛 正芳



新年明けましておめでとうございます。

皆様には穏やかで平和な新年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

昨年の私立大学を取り巻く環境を振り返りますと、全体の28.3%が定員割れを起こすという大変厳しいものでした。しかし、一方では、短大から4年制への転換、行政主導の大学誘致、国公立の新設などで大学自体の数は増加しており、この10年間で全国の4年制大学は163校増の合計686校、在学生278万6千人となり大学間の競争はますます厳しくなっています。

こうした状況下、本学でも昨年中、教育・研究の充実を図るためにさまざまな努力を重ねてまいりました。主なものを振り返ってみますと、学部教育の充実を図るため、商学部一部商業学科と文学部学科・専攻において収容定員の変更を文部科学省に申請しました。大学院教育については、時代の要請に応えるよう専門職業人養成を目指し、大学院経済学研究科がエコノメトリックス・コース(1年制修士課程)を、商学研究科がビジネスコースを神田校舎で夜間に開講いたしました。また、教育・研究環境の整備のため、法科大学院開設を視野に入れながら神田校舎8号館(仮称)建設に着工しました。法科大学院については、これまで開設準備を進めていた設置準備委員会を発展的に解消して新たに開設委員会を設置し、これにより本学の法科大学院構想は、平成16年4月開設に向けて最終的な準備段階を迎えることとなります。その他、導入教育の観点からクラス担任制度の見直しや、入学後の学生生活全般を支援する総合的な奨学金制度への改革、TA・授業補助員制度の拡充によるきめ細やかな授業の実施など教育面の充実のための諸施策も講じてまいりました。

平成15年は、本学の21世紀ビジョンである「社会知性」の開発のもと、魅力ある大学作りのため引き続き努力を重ねてまいります。今後とも本学の諸施策を温かく見守りご支援いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

[1月15日/ニュース専修1面]

箱根駅伝 タスキはつながった シード権狙えるチーム作りを…



1区 彦久保 文章



2区 行友 誠



3区 太田 宏嗣



4区 本多 幸希(右)



5区 福島 啓介



6区 吉川 裕也(前)



7区 乙訓 正幸



8区 菅野 慎吾(右)



9区 吉田 智



10区 福地 宏行(左)

第79回箱根駅伝(東京箱根間往復駅伝競走)が1月2、3日に行われ、2年連続60回目の出場となった伝統校の専大は、総合19位で完走した。例年、数々のドラマを生むこの駅伝。今年は初の学連選抜チームの出場や16年ぶりに全区間でタスキがリレーされたこと、暮れに万引き犯を取り押さえた本学のお手柄ランナー・太田宏嗣(文3・専大北上高)が3区に起用されたことも話題となった。

1年次生ながら1区に大抜擢された彦久保文章(商1・藤沢翔陵高)は、「予選会では力を実証済みだった(チーム内2位)と高尾信昭監督が語る通りの力走で12位とまずまずのスタート。エースが競う“華”の2区では、行友誠(商3・宇部鴻城高)が一時は6位に踊り出るなど好走した。しかし、3区では順位を18位に落とすと、流れを変えられないまま往路を5時間49分13秒の19位でゴールした。

復路は18年ぶりに雪のレースとなった。順位を上げられないまま9区から10区の鶴見中継所へ。あと34秒のところで繰り上げスタートと免れると、昨年(34秒差でリレー出来ず)の込もったタスキを大手町までつなげ、5時間44分59秒の18位でテープを切った。シード権獲得は今年もならず、今秋の予選会に再び挑む。

5区を走った福島啓介主将(法4・玉野光南高)は「タスキをつなぐことは当たり前のこと。後輩たちには1つでも上を目指して頑張ってもらいたい」と思いを託した。また、高尾監督は「選手層の薄さを痛感した。今年はシードを狙えるチーム作りをしたい」と心をすでに新チームへと切り換えていた。

来年は80回の記念大会となる。専大が今度はいかなる進化を見せるのか奮起に期待したい。(染谷
智子・文1)
■写真は専スポ編集部員が分担して撮影。

[1月15日/ニュース専修12面]